
ライダー × 仮面ライダー × スーパー戦隊 電王・ディケイド・シンケンジャー 時空超越大決戦
ライダー × 戦隊

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダー×仮面ライダー×スーパー戦隊
電王・デイクイド・シンケンジャー
時空超越大決戦

【Nコード】

N1217U

【作者名】

ライダー×戦隊

【あらすじ】

電王の世界に突然現れ始めた外道衆。

その原因はシンケンジャーの世界と融合してしまったから!?

全ての原因を探るため、電王とシンケンジャー、そしてデイクイドが交わる!

この作品は『仮面ライダーデイクイド〜融合世界〜』の電王編とファイズ編の話です。また、この作品と『融合世界』には多少の矛盾点が存在する場合があります。

プロローグ（前書き）

電王は『仮面ライダーディケイド』融合世界』の電王編、シンケンジャーは『侍戦隊シンケンジャー スーパー戦隊の世界の旅』が終了した設定で始まります。

それについての説明は入れないのでご了承ください。

ではどうぞ！

プロローグ

古来より、スキマより現れし異形の集団『外道衆』と闘って来た一
国の主とその家臣の一族。
人々は彼らをこう呼んだ。

『侍戦隊シンケンジャー』と。

絶滅センコクとの死闘も終わり、街に平和が訪れていた。

茉莉子とことは二人でショッピングに来ていた。

ことは「……よかった、平和になって。」

ことはは街を行きかう人を見て嬉しそうに微笑む。

茉莉子「ホントだね。」

茉莉子も応える。

そんな時、深めにキャップをかぶり、イヤホンを耳に着け、髪の一
部を紫色に染めた、ことはくらいの年の少年がダンスしながら近づ
いてきた。

茉莉子「!?!」

二人は異様さを感じたが、顔を上げた少年は

ことは「千明!?!」

千明「見つけたよ」

千明はいつもは言わないようなセリフを言い、茉莉子達を指差す。

茉莉子「ち、千明?」

と、その時後ろから悲鳴が聞こえる。

見ると数体の怪人が人々を襲っていた。

千明は怪人を指差していたようだ。

茉莉子「行くよ!」

茉莉とことはがショドウフォンを取り出し、変身しようと身構える。だがその前に千明は銀色のベルトをいち早く巻き、黒い箱のような物をベルトにタッチした。

【GUN form】

千明は紫色の龍のような仮面をつけた戦士に変身した。

茉莉「えっ？」

ことは「何やあれ？」

「???」君たちも早くにげなよ。せつかく出会えたのに残念だけどさ。」

二人の後ろからスーツに青いネクタイ、眼鏡をかけ、髪の一部を青く染めた青年が現れた。

しかし、二人はその顔もよく知っている。

ことは「流さん!？」

流ノ介もベルトを巻いて黒い箱のような物をタッチさせる。

【ROD form】

流ノ介は亀の甲羅を思わせる青い仮面をつけた戦士に変身する。

茉莉「えっ!？」

ことは「何がどうなってるの？」

その時怪人が言った。

イマジン「電王!」

茉莉「(電王……?)」

電王GF「お前達倒すけどいいよね? 答えは聞いてない!」

電王RF「僕に、釣られてみる?」

これがシンケンジャーと電王が交わった瞬間だった。

プロローグ（後書き）

次回から電王とシンケンジャーが本格的に絡みます。
ちなみにタロウズ以外はまだ出ない予定です。

ではまた次回

侍とイマジン（前書き）

次々とタロウズとシンケンジャーが遭遇です。

先に言えることは、源太どんまい！

ではどうぞ。

侍とイマジン

茱子達が電王と遭遇していた頃、源太も異形の大群を迎え討っていた。

シンケンゴールド「何なんだよこいつら！外道衆でもねえし……」と、

キンタロス「あゝ、そんなんじゃダメやな……」

モモタロス「仕方ねえ、行くか！」

シンケンゴールド「な、なんだ？」

そんな声が聞こえたかと思うと突然身体に何かが入って来た。

Mシンケンゴールド「俺、参……」

キンタロス「ここは俺に任せとき！」

キンタロスはモモタロスを押し退けてシンケンゴールドに入る。

モモタロス「上……って熊！途中で入ってくるなよ！！」

Kシンケンゴールド「固いでモモの字。（ちょっと待て！何なんだよお前ら！？）」モモタロス「いや、何って……うりゃあ！……イマジンだよ。」

襲い掛かってくる異形、すなわちイマジンを斬り付けながらモモタロスが応える。

Kシンケンゴールド「とにかく今はこいつら何とかするで！」

Kシンケンゴールドはキンタロスアックスを構え、モモタロスと共にイマジンに向かっていく。

電王GF「ばーんっ！」

電王RF「はあ！」

電王GFが軽やかにステップを踏みながらイマジンを撃っていき、電王RFもイマジンを尻ぎ払っていく。

その様子に呆気にとられていた茉莉とことはだったが、とにかく自分達もと再びシヨドウフォンを取り出し

茉莉ノことは『一筆奏上!!』

変身した二人もイマジンに斬り掛かっていく。

電王RF「君たちさっきの……」

シンケンイエロー「君たち?……流さんほんまにどうしたんや!？」

シンケンピンク「千明!ねえ!？」

電王GF「うう……何なの？」

その間にもイマジンが襲い掛かってくる。

電王RF「とにかく話は後!とりあえずあいつを倒すよ!!」

シンケンイエロー「……分かった。」

シンケンピンクとイエローもシンケンマルでイマジンを斬り付けていく。

【Full Charge】

電王RF「はああああ!!」

電王RFがデンライダーキックを放ち

【Full Charge】

電王GFがワイルドショットを撃ち

シンケンピンク/イエロー『二重の太刀!!』

シンケンピンクとイエローがシンケンマルで斬り付けてイマジン達は爆発した。

それを見て変身を解く四人。

茉莉「さて、どうなってるのか話してもらわよ。」

U流ノ介「そうだね。じゃあその辺でお茶でもしながら……」

茉莉「ふざけないで!」

R千明「亀ちゃん……このお姉さん怖い。」

ことは「亀ちゃん……?」

様子がおかしいことにことはが気付いた時

U流ノ介「(騙されるな茉莉!)」

R千明「(こいつらは俺達じゃない!)」

流ノ介と千明の声が聞こえる。

ことは「流さん、千明!？」

U流ノ介「あっちゃあ……」

茉莉「あなたたち何なの!? 流ノ介と千明をどうするつもり!？」

U流ノ介「分かった。全てを話すよ……ただ、何を聞いても信じてくれるかな？」

モモタロス「幻の技行くぜ! 俺の必殺技、Part 1!!」

モモタロスが走りざまにイマジンを次々と斬り付ける。

斬られたイマジンは爆発した。

Kシンケンゴールド「ううりやああああ!!」

Kシンケンゴールドはキンタロスアックスで周りのイマジンを斬り付け、爆発させる。

Kシンケンゴールド「ダイナミックチョップ横払いバージョン!」
後で技の名前を言うのか……ってそうじゃねえ!!」

Kシンケンゴールドの中の源太が叫ぶ。

Kシンケンゴールド「いきなり身体乗っ取ってるし、こいつは鬼じゃねえか!」うん! モモの字は確かに鬼や!」

モモタロス「うなずくな熊!……まあ説明すりゃ長いけどよ。」

モモタロスは自分達のことを話し始める。

茉莉「時の運行を守る戦士?」

U流ノ介「そ。僕はウラタロス、こっちの千明君に入ってるのがリユウタロス。まあ、種類的にはあいつらと同じイマジンってことになるかな。」

茉莉「じゃああなたも……」

U流ノ介「誤解しないでほしいけど、僕らは電王としてイマジンと闘っているし、繋がった時間を変える気もない。」

ことは「でも何で流さんや千明に入ってるん？」

U流ノ介「僕らも人から見れば怪物だからね。人目を避けるために誰かに憑依するんだ。それがたまたま流ノ介君と千明君だったわけ。」

ことは「でも何でうちのところにイマジンが現れたんやるか？」

U流ノ介「やっぱり赤い光が関係してるのかな？」

茉莉「赤い光？」

R千明「何かビルとビルの間が赤く光って、そこからいっぱいイマジンが出てきたんだ！」

ことは「それって……」

茉莉「うん。……あなたたち、屋敷に来てくれる？」

U流ノ介「え？」

源太「なるほど……つまりその電車から投げ出されて困ってたら、イマジンってのと闘う俺を見つけたってわけか。」

モモタロス「ああ……」

キンタロス「見たところお前もなかなか強い戦士みたいやし……頼む！良太郎と合流できるまでの間、一緒に行動させてくれんか？」

モモタロス「この姿じゃ間違いない怪物扱いだからな。」

源太「分かった！じゃあとりあえず屋敷に行くか。そこに俺の仲間もいるからよ。」

モモタロス「助かったぜ！じゃあ悪いけどよ……」

茉莉達が屋敷に着いた時、門のところに源太がいた。
が、

茉莉「源…太？」

源太は何故か黄色の着物を着ており、逆立っているのを無理やり結んだような髪型をして前髪の一部分が赤と黄色に染まっている。

さらに右目が赤、左目が黄色になっていた。

MK源太「(M:… たく狭えな)(K:仕方ないやろ、三人分な
んやから)……それよりさすがにこの格好はないんじゃないか？(K:んなこと言っただってこれが俺達の格好やからな……)」

そう、モモタロスとキンタロスは二人いっぺんに憑依しているのだ。
と、

MK源太「(M:ん？この気配は…… 亀！それに小僧か！)」

MK源太は茉莉達の方を向く。

茉莉「仲間…… だよね？」

MK源太を指差してU流ノ介に聞く。

U流ノ介「うん……先輩にキンちゃん、何やってるの？」

MK源太「(M:仕方ねえだろ！入れる身体一つなんだから！)」

R千明「何か気持ち悪い…… (気持ち悪いって……源ちゃんかわいそ)」

と、その時

彦馬「おお、お前達いいところに……ん？源太、何だその格好は？」

源太「……聞かないでくれ、じいちゃん。」

ことは「それよりどないしはったんですか？」

彦馬「ああ……実は殿のご様子がおかしいのだ。とにかく来てくれ。」

茉莉「分かった。」

一同が玄関に向かう。

その時モモタロスが

MK源太「(M:あ？この気配は……)」

その頃デンライナーでも動きがあつた。

オーナー「モモタロス君達の居場所が分かりましたよ。」

良太郎（少年）「本当ですか!？」

良太郎（青年）「一体どこに……?」

オーナー「時間で言えば2011年6月17日……ですが、ややこしいことになってしまったのです。」

ユウスケ「ややこしいこと?」

オーナー「はい。どうやら我々『電王の世界』とは別の世界に飛ばされたようです。」

士「待て! 何で別の世界に飛ばされるんだよ!？」

紅渡「それは僕が説明します。」

オーナーの後ろから紅渡が姿を現す。

夏海「紅さん?」

幸太郎「何だよあんた?」

オーナー「彼は世界の管理人です。」

良太郎（青年）「世界の管理人……」

紅渡「（やっぱり記憶が……でも今は一刻を争う……）電王の世界が特殊なケースなのは知っていますよね?」

士「ああ。」

紅渡「そもそも電王の世界自体は、同じ人間は存在しますが元を正せば同じ世界ですから認識の違いもほとんどありません。」

海東「待ちたまえ、なら何故電王の世界に……」

紅渡「電王の世界だけなら問題はなかった。しかし、さらに別の世界の一部とも融合したんです。それだけならディケイドが介入すること安定はしたんですが、その融合した場所で何者かがイマジン

と契約したんです。それによって融合が進み、モモタロス達はその世界に飛ばされたんです。このままでは完全に融合を果たし、デイケイドですら対応できなくなります。」

士「それで？融合したのはどのライダーの世界なんだ？」

紅渡「ライダーの世界ではありません。」

幸太郎「じゃあ一体……」

紅渡「世界を旅した侍……シンケンジャーの世界です。」

侍とイマジン（後書き）

次回はまたタロウズ & a m p シンケンジャー視点に戻ります。

丈瑠の様子がおかしい原因は……？
あいつが登場します。

戦士、シンケンジャーの世界へ（前書き）

お待たせしました。

えっと、タイトルはこうですが基本的にまだタロウズとディケイドや電王は合流しません。

あと、姫を急遽登場させることにしました。

では、どうぞ。

戦士、シンケンジャーの世界へ

茉莉達が目にしたもの。

それは、純和風な部屋の中で浮きまくりの椅子に座り、白い襟巻きをして髪が一部白くなり、瞳も同じく白の丈瑠が優雅に紅茶をすすっていた。

茉莉「えっと……」

ことは「え？……え？……」

思わず退いてしまう茉莉とことは。
すると丈瑠が

W丈瑠「お前達、いくら私が高貴なプリンスとはいえ、あまりじろじろと見るでない。まあ、家来になりたいのならば別だが……」

MK源太「（M：だ・れ・が・てめえなんかをじろじろ見るか！それに家来なんかになるか！）」

W丈瑠「うん？なんだ、お供その1ではないか。それにお前達も。そんなに私に会いたかったのか？」

U流ノ介「はあ……面倒だねえ（何なんだあいつは！？あれもお前達の仲間なのか！？）まあ仲間って言えば仲間なだけださ……」

MK源太「（K：ぶっちゃけあんま関わらん方がええ奴やしな……）何だよそれ……？」

W丈瑠「とにかく待っている。今料理番が茶菓子を作ってくる……うむ、来たな。」
すると

「……」お待たせ。とりあえずクッキーを焼いてきたぞ！

その声に振り向くと、髪を下ろし、前髪の一部と瞳が緑色の少女がクッキーが盛られた皿を持ってきていた。

だがその姿を見て、

茉莉／ことは／流ノ介／千明／源太「姫（薫／お姫さん）！？」

シンケンメンバーはぶったまげてしまう。

そう、そこにいたのは先代当主、薫だった。

R千明「あ、オデブちゃんだ。」

D薫「おっ、モモタロス、皆！」

もつとも、デネブが憑依していることで、いつもの凜とした顔からは想像が出来ない程のにやかな顔をしているが、と、

W丈瑠「（……いい加減にしろお！）ぬ！？」

心のなかで丈瑠が怒鳴り、ジークが飛び出した。

MK源太「（M：やれやれ……）」

それを気にモモタロス達も抜ける。

丈瑠「何なんだ一体！？」

丈瑠「なるほど……時を越える怪人か。」

話を聞いた丈瑠は考え込むように腕を組む。

薫「信じがたい話だが……だが本当なのだろう。」

丹波「姫！何故このような異形の言うことに耳を貸すのです！？」

薫「確かに異形だ。だが……」

丈瑠「こいつらは見た目こそ恐ろしいが、雰囲気には邪悪さはない……」

……おそらく言っているように電王と言う戦士なのだろう。」

モモタロス「……なあ？何なんだよ殿とか姫とか。それにあの金ぴかはなんだよ！？」

丈瑠「俺達は外道衆という怪物と闘っていた侍戦隊シンケンジャーだ。流ノ介はブルー、茉莉はピンク、千明はグリーン、ことははイエロー、源太はゴールドだ。そして俺は志葉家19代目当主、シンケンレッドの志葉丈瑠だ。」

キンタロス「カラフルな侍やな……ん？闘っていた？」

彦馬「殿達が外道衆御大将血祭りドウコクを倒したことにより、長き因縁に終止符をうつたのだ。そもそもシンケンジャーとは、30年前に外道衆に立ち向かうため、初代志葉家当主とその家臣がモ

ジカラを編み出して力を纏ったのが始まりなのだ。」

丹波「外道衆との闘いは熾烈を極め、シンケンジャーの力は代々子孫に受け継がれていった。しかし、18代目当主である姫、その影武者であり後を継いだ丈瑠殿が……………」

丈瑠／薫『爺（丹波）、長い！』

モモタロス「……………要するに、お前らも戦士なんだな？」

丈瑠「ああ。」

とその時、鈴の音が鳴り響き、おみくじ型の何かから札が出てきた。リュウタロス「何これ面白い！」

ことは「リュウちゃん触ったらあかんよ？」

デネブ「これ何なんだ？」

千明「スキマセンサー。外道衆の出現を教えてくれた。」

彦馬「殿、二十四番にございます。」

丈瑠「よし、行くぞ！！」

士達はいち早くモモタロス達を見つけるため、二手に分かれてシンケンジャーの世界に降り立っていた。

士「やれやれ……………まさか着いてそうそうナナシの相手とは。」

士、海東、青年良太郎、侑斗はナナシに囲まれていた。

侑斗「こいつらがシンケンジャーって奴らの敵なのか？」

海東「うん、まあ彼らは下っぱだけだね」

良太郎（青年）「とりあえず倒さないと……………」

士「行くぞ！」

士／海／良（青年）／侑『変身！！』

【KAMENRIDE - DECADE】

【KAMENRIDE - DIEND】

【LINER form】

【ALTAIR form】

四人はそれぞれの武器を構え、ナナシに向かっていく。

丈瑠「何だあいつらは……」

丈瑠達の前にいたのは銅色の異形であった。

薫「だがセンサーに反応した以上、外道衆には違いないはず……」

モモタロス「違うぜ、あいつらは鬼だ。」

流ノ介「鬼だと!？」

ウラタロス「でも僕らが倒したはずんだけどね……」

源太「とにかくあいつらはぶっ倒してもいいんだろ?なら考えんのは後にしようぜ!？」

丈瑠「そうだな……行くぞ!」

『一筆奏上!!』『一貫献上!!』

丈瑠達が変身する。

シンケンレッド「シンケンレッド!!志葉丈瑠!」

しかし、

Uシンケンブルー「うん、なかなかいい感じ(なっ!?)」

Rシンケングリーン「イエー!(おい……)」

Dシンケンイエロー「お邪魔します(あれ?ウチなんや)」

Kシンケンゴールド「うん!(『うん!』じゃねえよ!)」

W姫シンケンレッド「やはり私は高貴な立場でなくてはな(……)」

Mシンケンピンク「ってかなんで俺ピンクなんだよ!?(嫌ならいいわよ、むしろ出て……)まあ、仕方ねえ…行くぜ行くぜ行くぜ!

!(ちよつと!そんなドタドタ走らないでよ!!)」

何とも賑やかにレッド以外がゲルニユートに向かっていく。

シンケンレッド「俺余ってるが……今回はまあいいか。」

シンケンレッドもゲルニユートに向かっていく。

その頃志葉家では、六人の黒子が怪しげに行動していた。それは志葉家に潜入したユウスケ達である。

夏海「……なんでこんな格好してるんですか？」

ユウスケ「この格好なら自由に動き回れるからね」

そんな6人を他の黒子は遠目に見ている。

テディ「……完全に浮いているようだが？」

その時だった、轟音と共に屋敷が揺れた。

良太郎（少年）「な、なに!？」

幸太郎「とにかく行ってみよう!」

6人が外に出ると、そこにはモールイマジンの大群とそれに向き合う彦馬と丹波がいた。

彦馬「こいつらは……まさか殿達の留守を狙って!？」

丹波「ああ……まずいぞ!屋敷がおとされたら……」

ユウスケ「任せて!」

黒子姿のユウスケ達が彦馬達の前に出る。

丹波「黒子……ではない!？」

彦馬「その声、もしか……!」

そこで6人が黒子服を脱ぎ捨て、本当の姿になりユウスケ「変身!」

夏海「変身!」

幸太郎「変身!」

【STRIKE form】

ユウスケは赤い鍬形ライダー『クウガ』に、夏海は白いコウモリライダー『キバーラ』に、幸太郎は電車ライダー『NEW電王』に変身する。

NEW電王「テディ」

さらにNEW電王が指をならし、テディが変化したマチエーテディ

がNEW電王の手に握られる。

コハナ「とりあえずここは幸太郎達に任せて避難しましょう!」

良太郎（少年）「さあ!」

少年良太郎とコハナは彦馬と丹波を屋敷へ避難させる。

紅渡「始まったか……電王にシンケンジャーにディケイド、面白い……」

紅渡はビルの上に立ち眩く。

と、背後に誰かが立つ。

紅渡が振り向くと、そこにはエンペラーキバがいた。

紅渡「……早かったな、キバ」

特に驚く様子もなくエンペラーキバに声をかける。

Eキバ「あなたは何者です？僕に化けてディケイドに情報を教えた
りして何のつもりですか？」

紅渡「なんだ……『世界の管理者』なら知ってると思ってたけど。

失望したよ……俺、そういう顔してるだろ？」

紅渡だった人物は姿を本来の黒い短髪にストロールを羽織った姿に変
え、不気味な笑みを浮かべている。

Eキバ「……カイ!」

そこにいたのはイマジンの首領的存在、カイだった。

戦士、シンケンジャーの世界へ（後書き）

はい、タロウズの数合わせのために姫出しました。

普通に全員に憑依させるのも良かったんですが、『俺余ってるだろ』展開をやりたくなった次第です。

そしてカイ。

『カイ！？なんで！？』とか『ってかカイって化けるとか出来ないよね！？』とか色々あると思いますが、次回明らかにしていきます。

ではまた次回！

蠢く陰謀（前書き）

カイが何故復活したのか……そして何故渡に化けられたのか……

では始まります

蠢く陰謀

Eキバ「……何故です？あなたに他人に化ける力はない。第一、電王の活躍で消滅したはずです」

カイ「確かに俺の時間が完全に分離して一度は消滅した……だが、『誰かの記憶』にあれば存在は消えない。皮肉にも電王が俺を記憶していたから、電王の時間と不安定ながら再び繋がる事が出来た。だから電王の世界にはいつまでもイマジンが現れるんだ」

Eキバ「そういうことか……だがそれでもお前が姿を変えたり、異なる世界に出現する理由にはならないはずです！一体どうやって……世界はそう簡単に渡り歩けるものではない！」

カイ「電王の世界にディケイドが介入したことで、面白い事になった……ある組織が俺に接触し、俺はその仲間となった。そして世界を渡り歩く力を身につけたのさ」

Eキバ「まさか……」

カイ「そうだ、俺は大ショッカーの一員なのさ！そして様々な世界にイマジンをばらまいた。もともと、大概はそれぞれの世界の戦士が気付かないまま自分達の敵と共に倒したが……そしてある世界で俺はこれを手に入れた」

カイが示したのは水色のカードだった。

Eキバ「それは護星天使のカモミラージュ！？」

カイ「そうだ……こいつは緑の護星天使が死んだ時間から奪ったんだ。」

Eキバ「だが、護星天使でないお前が何故！？」

カイ「特異点は時間や世界に順応する……そしてスーパー戦隊の世界は壁が曖昧だ。ゴセイジャーの力が届くここなら使えるんだよ！」
カイがそういうと同時にカードが光り、再びカイの姿を変える。
次に化けたのは

Eキバ「乾さん……いや、サムライワールドの烈鷹ですか」

烈鷹^{カイ}「じゃ、行くぜえ!？」

カイ烈鷹は刀を抜いてEキバに襲いかかる。

Eキバ「そうはいかない!」

Eキバはカイ烈鷹の刀をザンバットソードで受けとめる。

クウガ「らあっ!……だいぶ減ったかな?」

NEW電王「じゃ、そろそろ決めるか。行くぞデディ!」

マチエーデディ「ああ!カウントは?」

NEW電王「んじゃ、10……いや、6でいい」

マチエーデディ「よし!6、5、4……」

マチエーデディのカウントと同時にNEW電王が走り出し、次々とイマジンを斬り付けていく。

クウガ「はあ!」

キバーラ「はあ!」

それに合わせてクウガとキバーラもマイティキック、ソニックスタ
ップを放つ。

マチエーデディ「2、1……」

NEW電王「はあ!」

NEW電王が最後のイマジンを斬り付ける。

マチエーデディ「0」

カウント0と同時にイマジンは全員爆発した。

シンケンレッド「はあ!」

シンケンレッドは圧倒的な強さでゲルニユートを斬り付けていく。

その動きには微塵の隙もない、まさしく侍の動きである。

しかし、他のシンケンジャー……というよりはそれに憑依するタロ

ウズの闘いかたは侍からはあまりにもかけ離れている。

強いことは強い、だが荒いというか……むちゃくちゃというか……
Mシンケンピンク「おらっ！（ちよっ、バカ！）」

女の戦士に憑いたのを忘れて思いつきりヤクザキックをかますモモ
タロス、

Uシンケンブルー「はっ……！（よそ見をするな！）」

ピンクとイエローをチラ見しながら闘うウラタロス、

Kシンケンゴールド「効かんで！（こっちは痛えんだよ！）」

自分のタフさを基準に闘うキンタロス、

Rシンケングリーン「行つくよー！（おい！？みんなにも当たるぞ
！考える！）」

周りを考えずに銃を乱射するリュウタロス、

W姫シンケンレッド「ふっ……（……何だこのやる気の無さは）」

本人は大真面目に闘っているが、他からはやる気がないように見える
ジーク、

Dシンケナイエロー「はあ！（……なんで素手なん？）」

仕方ないのだが武器がないデネブ、

シンケンレッド「はあ……決めるか」

シンケンレッドは半ば諦めたようにシンケンマルを烈火大斬刀に変
える。

シンケンレッド「百火繚乱！！」

炎を帯びた烈火大斬刀でゲルニユートを斬り付ける。

ゲルニユートは燃えるように爆発した。

さらに

シンケンレッド「大筒モード！」

獅子一輪弾で残りも爆発させ、全滅させる。

それを見てリュウタロスは興奮して

Rシンケングリーン「すごい！かっこいい！ねえねえ、コレも変わるの？（まあ、一応はな……ただ俺の場合は槍だぞ？）えー？つま
んない……僕もどっかゝんってしたいー！！（いや、そんなこと言

われても……)」

【ATTACKRIDE - SLASH】

ディケイド「はあ！」

ディケイドがライドブッカーでナナシを斬りつけ、刃が間に合わないならば蹴りを放ち次々と倒していく。

ゼロノスAF「おら！」

電王LF「やあ！」

二人もデンカメンソードとゼロガッシャーで斬り伏せていく。

【ATTACKRIDE - BLAST】

ディエンドのプラストでナナシは粗方全滅する。

だが、次の瞬間4人に何者かが斬り掛かってきた。

カイ「くっ……」

Eキバの攻撃で烈鷹のカモミライジュが解けるカイ。

カイ「やるな……さすがは原典のライダーだ」

Eキバ「終わりです。まかれたイマジンもシンケンジャーと電王が……」

カイ「だが、目的は達成できた」

Eキバ「どういう……！？」

Eキバはそこである異変を察知した。

Eキバ「ばかな……まさかこれは！？」

カイ「シンケンジャーの世界と電王の世界をくつつけたのはこついう理由だ」

ディケイド「何だこいつ!？」

4人に斬り掛かってきたのは茶色で、どこか牙を連想するような仮面のライダーだった。

ゼロノスAF「バカな、牙王だと!？」

牙王「はああああ……」

牙王は引く唸ると再び斬り掛かってくる。

ゲルニユートを倒し、ひとまずタロウズは離れ、シンケンジャーも変身を解こうとするが、

モモタロス「!?!……おい、変身解くな!!」

次の瞬間、シンケンジャーとタロウズの目がけてエネルギー弾が向かって来ていた。

シンケンレッド「くっ!」

間一髪全員避けたが、エネルギー弾が着弾した地面は爆発し、そのあとが生々しくえぐられている。

シンケンブルー「何だ今のは!?!」

驚くシンケンジャーとタロウズの前に、ガンモードのデンガッシャーを構えた、電王と瓜二つのライダーが現れる。

モモタロス「てめえは!」

ネガ電王「悪の軍団(仮)再び参上だ」

志葉家を守ったと思った矢先、NEW電王達に大量の独楽がぶつけ

られた。

クウガ「くっ……？」

NEW電王「今のはまさか……」

幽汽「また……ソラが泣くううう！」

Eキバ「くっ……まさか三途の川を利用して悪のライダーを蘇らせるなんて！」

カイ「じゃあ俺は最後の仕上げをするから……」

Eキバ「待て！」

追おうとするが、カイを守るように二体のイマジンが立ちふさがる。

Eキバ「くっ……仕方ない！」

ザンバットソードを構え、イマジンに斬り掛かっていく。

カイ「ふ……」

廃墟の一室に座り込むカイ

するとその背後に異形が立つ

カイ「……あんたか」

「……何だかよく分からない奴らを蘇らせたようだが、大丈夫なんだろうね？」

カイ「ちゃん契約は守る……俺、そういう顔してるだろ？」

「……信用できそうにない顔してるんだよ、お前さんは」

カイ「心配するなよ……骨のシタリさん」

カイの後ろに立つのはゴセイジャーとシンケンジャーの闘いの裏でゴーカイジャーに倒されたはずの骨のシタリだった。

シタリ「まあ、外道衆が蘇るなら何でもいいんだがね……」

シタリはそう言うつと外に向かって歩きだす。

カイ「どこに行く？」

シタリ「なあに……シンケンジャーの苦しむ顔をこっそりとも見てやろうと思つてね」

そして再び歩きだす。

カイ（……くくっ）

そんなシタリの後ろ姿を見送りながら、カイは不適な笑みを浮かべていた。

蠢く陰謀（後書き）

次回、VS悪のライダーです

シタリが生きてるのは特に深い意味は無いです……運が良かったただけで

ではまた次回

集う戦士達（前書き）

いやはや……テストという呪いの期間が過ぎ、連載再開です。

ここで全員が揃います。

まあ、まだクライマックスには程遠いですが……

ではどうぞ

集う戦士達

牙王「はあ！」

電王LF「うわあ！」

牙王がガオウガッシャーで電王LFを斬り付ける。

ゼロノスAF「ちっ……こいつ、前より強くなってる」

牙王「どうした？やはり俺には勝てないか？」

その時

【FINAL ATTACK RIDE - DEDEDE DECADE】

ディケイド「勝つてやるさ！」

牙王「なめるな！」

【Full Charge】

ディメンションキックにあわせて、牙王もキックを放つ。

ディケイド「ぐはっ……」

ディケイドは打ち負け、転げる。

牙王「はあ……ぐっ!？」

追撃しようとする牙王をディエンドが撃つ。

ディエンド「このままでは分が悪い……一旦退こう」

【KAMEN RIDE - RIOTROOPER】

ディエンドはライオトルーパーを呼び出す。

牙王「くっ……」

ディエンド「行くよ」

牙王がライオトルーパーを相手にしている間に四人は退却する。

ネガ電王「はあ！」

ネガ電王はデンガッシャーガンモードを乱射し、シンケンジャーとタロウズを追い詰めていた。

シンケンブルー「何なんだこいつは……？」

シンケンイエロー「強すぎる……」

モモタロス「バカ野郎！諦めんなー！」

ジーク「お供その1の言うとおり……我が家臣ともある者が情けない！」

シンケングリーン「俺達はお前の家臣じゃねっての……」

そう言いながらも、再び立ち上がるシンケンジャー達。

ネガ電王「そうこなくてはな……だが、遊びは終わりだ」

ネガ電王はデンガツシャーをソードモードにし、そのまま全員に斬り掛かってくる。

シンケンレッド「くっ、まだこんな力が……」

【Full Charge】

ネガ電王がベルトにパスをタッチする。

ウラタロス「あれ、ヤバイよ……」

モモタロス「仕方ねえ、一旦退却だ！」

シンケンレッド「流ノ介！」

シンケンブルー「はっ！」

シンケンブルーが水の幕を張る。

ネガ電王「こんなもの！」

ネガ電王は水の幕を切り裂くが、そこにシンケンジャー達はいない。

ネガ電王「逃げたか……」

幽汽「はあ！」

ムチを振るう幽汽に苦戦するNEW電王達。

NEW電王「くそっ……」

クウガ「夏海ちゃん、ちょっと借りるね！」クウガはキバースーベルを手に取り、タイタンフォームに超変身する。

クウガ「はああああ……」

さらに雷電を纏い、ライジングタイタンとなる。
クウガRT「はっ！」ライジングタイタンソードで幽汽に斬り掛かる。

幽汽「はぁ！」

幽汽は再び独楽を投げつけて来るが、ライジングタイタンソードで叩き落とし、多少当たる分は気にせず突き進む。

クウガRT「おりゃぁ!!」

独楽を退け、クウガRTは幽汽に一撃を加えた。

幽汽「ぐう……」

幽汽が怯むと同時に幽霊列車が通りすぎ、幽汽の姿は消えていた。
クウガRT「何とかなった」

NEW電王「逃がしたただけだ……多分また来る」

そう言いながらNEW電王は変身を解き、クウガもそれにならう。
士「厄介な事になったな」

ユウスケ「士！」

そこには士達四人がいた。

幸太郎「厄介なことって……？」

良太郎（青年）「牙王も蘇ったみたいなんだ……闘ったけど強くなってる」

良太郎（少年）「牙王!？」

志葉家から出てきた少年良太郎達も驚く。

モモタロス「あの偽物野郎もきやがったぜ……」

ハナ「モモ！」

彦馬「殿！それにお前達も!!」

傷だらけのシンケンジャーとタロウズも志葉家に到着した。

丹波「と、とにかく治療を！」

士「………本当に何が起こってるんだ？紅の言ってたことと違うぞ？」

紅渡「すみません……でもあれは僕ではないんです」

ユウスケ「紅!？」

海東「……どういうことだい？」
丈瑠「待て、とりあえず話は中で聞く。皆の治療が先だ」
紅渡「分かりました」
全員が屋敷に入って行くのをこっそりと見ていた者がいた。
シタリ「ちっ……やはり『あれ』を急がせた方がいいね」
シタリはそのままスキマへと消える。

シタリ「カイ！」

シタリがスキマスからカイの元に現れる。

カイ「どうした？」

シタリ「例の物、あれを急いでほしいんだが……」

カイ「やはりか……そう言うと思って、もう準備はしてある。後
はあんたと俺の力を注げば完成だ」

シタリ「そうかい……」

二人が見つめる先には鏡があり、不適に笑うカイとシタリが映る。
否、二人以外にもそこにはいないはずの7人の人物の姿もあった。

良太郎（青年）「カイが！？」

紅渡の話を聞いて良太郎をはじめ、電王のメンバーは驚きを隠せない。
い。

薫「カイというのは何者だ？」

モモタロス「イマジンを従えて、消えた自分の時間を繋げるために
良太郎の時間を消そうとした奴だ……」

侑斗「あの時、俺と野上と野上のイマジンとの闘いで消えたと思っ
てたけど……」

良太郎（少年）「僕らが覚えてたから、消えなかったんだ……」

紅渡「そしてカイは大シヨツカーの一員となっていました」

士「大シヨツカーか……厄介だな」

丈瑠「大シヨツカー？」

海東「あらゆるライダーの世界の悪が集合した、最大最悪の軍団だ………そして、士は元大シヨツカーの大首領だ」

丹波「なにっ!？」

丹波が顔を険しくさせる。

夏海「大樹さん!何でそんなこと……」

海東「闘いの最中に敵からその事実を告げられ、動揺した所を突かれたら終わりだ………ならいつそのこと真実は話しておいた方がいい」
丈瑠「……どうなんだ、士？」

士「確かに俺は大シヨツカーの大首領だった………だが、大シヨツカーは俺達が潰した」

幸太郎「自分の組織を潰したのか……？」

士「『ライダーの破壊』の意味をはき違えてたこともあるが……仲間裏切つて、そして信頼していた奴に裏切られて、行き場を無くした俺が『ライダー』として世界を守るために潰した、それだけだ」

流ノ介「……それで、結局お前は『正義』と『悪』どちらなんだ？」
士「さあな……おれは通りすがりの仮面ライダーだ」

丈瑠「ふっ……お前らしいな」

それを聞いて丈瑠は安心したような顔をする。

丈瑠「前にも言ったが、俺達はお前達を追い出す気はない……仲間だからな」

紅渡「では僕はこれで……」

源太「何だよ?一緒に闘ったくれないのか？」

紅渡「これ以上僕らが異世界に介入すれば、崩壊を招きますから」
そう言つてオーロラを通つて消えた。

剣崎「どういうことだ、渡」

世界の狭間の宇宙に戻った紅渡は剣崎によびとめられた。

紅渡「何がですか………なんて聞く方がおかしいですよね」

剣崎「確かにお前は『電王の世界』にまぎれこんだことはある………

だが、『管理人』が異世界に介入したらどうなるか分かるだろう？」

紅渡「それでもあの世界は複雑に絡んでいた………加えて本来いないはずのミラーモンスターを確認しました」

剣崎「ゲルニユートのことか？」

紅渡「それも、ですが………やはり介入がいけなかったみたいです」

剣崎「だが、俺達がこれ以上介入するわけにもいかない………あいつらに任せるしかないのか」

剣崎は仕方がないというように渋々納得した。

紅渡「これ以上ややこしくならなければいいんですが………」

集う戦士達（後書き）

紅渡の登場はこの作品では最後です。

ちなみにライ戦の考え方では、

『ミラーワールド自体はどの世界でも存在しているが、それを認識しているのが原典リイマジ両方の龍騎世界だけ』

なので、きっかけさえあればミラーモンスターは出てきます。

大ショッカーであるカイは当然ミラーモンスターを知っていると思うので、呼び出しました。

……まあ、『普通の』ミラーモンスターではないんですけどね。

ではまた次回

ダークシンケンジャー（前書き）

タイトル通り、シンケンジャーの偽物登場です。
その正体は……

ダークシンケンジャー

それぞれの情報等を伝え終わり、これからのことについて話す一同。
丈瑠「とりあえずイマジンや外道衆は出現してもすぐに駆けつけ、倒せばいいが……」

士「問題はあのライダー達だな」

敵の強さを考えると、おそらくは全員でかかって三人を倒せるか否かだろう。

そんな時

千明「でもさ、何でまだ外道衆が出てこれんだ？」

その言葉にシンケンメンバーははつとする。

確かに最近まで絶滅センコクと闘っていたが、基本的に御大将のドウコクやクサレ外道の長マンプク、血祭りのブレドラン等がいなければ外道衆は活動出来ない筈である。

茉莉「単なるアヤカシの力じゃない……よね？」

流ノ介「ならば、一体誰が……」

???「アタシだよ」

その声に振り向くと、姿見の中にシタリがいた。

薫「骨のシタリ!？」

源太「おいおい……お前倒されたんじゃないのかよ!？」

シタリ「ふん、あんな海賊なんかにはやられるアタシじゃないよ……
また仮面ライダーなんてのがいるみたいだけどまあいい、これから面白いことになるよ……ウククッ」

その時、一人の黒子が慌てて駆け込んできく。

話を聞いた彦馬の表情が一気に険しくなる。

彦馬「イマジンとナナシが大量に現れたようなのですが……それを率いているのは殿達の姿をした輩のようなのです!」

ことは「えっ?」

丈瑠「……俺達の信用を墮落させる魂胆か」

丈瑠はシンケンマルを出し、鏡の中のシタリに突き付ける。
シタリ「アタシを斬りたきや自由に斬りな……無駄だけどね……それに早く街に行かないとマズいんじゃないのかい？」

丈瑠「くっ……」

良太郎（青年）「これが外道衆……」

モモタロス「なんて野郎だよ……」

その時、士と海東が姿見に近づく。

士「なるほどな……カラクリは大体分かった」

海東「君らは街の方に行きたまえ……こっちは僕らがやる」

士／海東「変身っ！！」

【KAMENRIDE - DECADE】

【KAMENRIDE - DIEND】

変身した二人はそのまま鏡の中、ミラーワールドに飛び込む。

丈瑠「……頼んだぞ！」

そして残りは街へと向かう。（ただしタロウズはデネブとテディをのぞいて志葉家に残る）

街では黒子の報告通り大量のナナシとイマジンが暴れていた。

さらに、それを率いるシンケンメンバーもやはりおり、シンケンマルで街を破壊したり人々に斬り掛かったりしている。

千明「あんにやる……」

源太「やめろ！俺達の偽物野郎！！」

源太の叫びに気が付いたのか、偽シンケンジャーは丈瑠達を振り返る。

偽源太「偽物？違うな」

偽茉莉「そう……私達は偽物じゃない」

流ノ介「ふざけるな！我々がここにいる以上、お前達は偽物のはずだ！」

偽薫「確かに私達はお前達ではない……だが『偽物』と括られる存在でもない」

と、そこで茉莉が偽シンケンジャーの違和感に気が付いた。

茉莉「利き手が私達と逆……？」

偽丈瑠「さすがは茉莉だな……俺達は鏡の中のお前らそのものだ」

丈瑠「鏡像が具現化した存在か……だが貴様らが外道衆に加担する以上、倒すまでだ！」

そしてシンケンジャーとライダーは一斉に変身の構えに入る。

「一筆奏上！！」

「一貫献上！！」

「変身！！」

【SWORD form】

【LINER form】

【STRIKE form】

侑斗「デネブ！」

デネブ「よし！」

【VEGA form】

シンケンジャー、クウガ、キバラー、電王、ゼロノス、NEW電王が鏡像シンケンジャー達の前に立つ。

鏡像丈瑠「よし……俺達も行くぞ」

なんと鏡像シンケンジャーもショドウフォンを取り出す。

「一筆奏上！！」

「一貫献上！！」

鏡像シンケンジャーは全員が黒いスーツに包まれ、マスクの文字のがそれぞれの実物のシンケンジャーの色、すなわち実物の戦士と反転した色のシンケンジャーに変身し、名乗りを始めた。

ダークシンケンレッド「ダークシンケンレッド！！シバタケル！」

ダークシンケンブルー「同じくブルー！！イケナミリュウノスケ！」

ダークシンケンピンク「同じくピンク！！シライシマコ！」

ダークシンケングリーン「同じくグリーン!!!タニチアキ!」

ダークシンケンイエロー「同じくイエロー!!!ハナオリコトハ!」

ダークシンケンゴールド「同じくゴールド!!!ウメモリゲンタ!」

ダーク姫シンケンレッド「ダークシンケンレッド!!!シバカオル!」

ダークシンケンレッド「外道無法の侍戦隊!」

ダークシンケンジャー「ダークシンケンジャー、参る!!!」

鏡像のシンケンジャー、『ダークシンケンジャー』はナナシやイマジンと共に襲い掛かって来た。

シンケンレッド「来たか……行くぞ!」

ミラーワールド内でシタリと闘うディケイドとディエンド

ディケイド「はあ!」

ライドブッカードで斬り掛かるのをシタリは杖で防ぐ。

【ATTACKRIDE・BLAST】

背後からディエンドが射撃する。

しかし

シタリ「甘いよ!」

シタリはそれをかわし、カウンターのようディケイドを弾き飛ばす。

ディエンド「土!」

ディケイド「ちくしょう……見た目に反して強えじゃねえか」

シタリ「この程度あしらえなきゃドウコクの側にはいるなんて出来やしないさ」

ディエンド「……」

【ATTACKRIDE・INVISIBLE】

ディエンドはインビジブルで姿を消す。

シタリ「おやおや……お前さんの仲間は逃げたね」

ディケイド「だが俺は残ってるぜ？」

そのまま再び斬り掛かる。

シタリ「何度やろうと無駄だよ……」

シタリが勝ち誇ったように言った時

【FINAL ATTACK RIDE - DIDI DI DI END】

シタリ「なに……ぐああ!!」

シタリにどこからかディメンションシュートがぶち当たる。

するとディエンドが姿を現した

シタリ「お前さん逃げたんじゃ……」

ディエンド「作戦さ……逃げた振りをして、確実に君を仕留めるためだね」

シタリ「おのれ……」

シタリが狼狽えた時、

【FINAL ATTACK RIDE - DEDEDE DECADE】

ディエンドとの会話に気をとられていたシタリに、ディケイドのディメンションキックが命中する。

シタリ「ぐああああ!!」

シタリは断末魔を上げて吹き飛ぶが、その姿は途中でぶれて消える。ディエンド「なんだ？」

シタリ『やるじゃないか……分身とはいえ、アタシを倒すなんて』

ミラーワールドにシタリの声が響くが、姿はない。

シタリ『お前さんの相手ははずれしてやるから、今はおとなしくしとくんだね』

ディケイド「この……っ!」

ディエンド「止めたまえ……それに僕らに残された時間はもうない」
見ると手の先が粒子化をはじめていた。

ディケイド「っ……くそ!」

ディケイドとディエンドはミラーワールドから脱出する。

シンケンレッド「くそ……」

ダークシンケンジャーとナナシやイマジンの軍団と闘うシンケンジャーや電王達も苦戦をしていた。

ナナシやイマジンはたいしたことはない。

しかし、ダークシンケンジャーの強さが圧倒的すぎる。

ダークシンケンレッド「クククッ……いい様だな」

膝をつくシンケンレッドを見下してダークシンケンレッドが言い放つ。

シンケンレッド「このままでは……」

ダークシンケンレッド「さて……死ね！」

ダークシンケンレッドがシンケンマルを振り上げた時、独特の音楽を鳴らしてデンライナーがダークシンケンジャーを弾き飛ばすように横切る。

デンライナーが過ぎ去った後にはシンケンジャーや電王達はいなかった。

ダークシンケンレッド「ちっ……逃げたか」

その時、ダークシンケンジャー達の指先が粒子化しはじめる。

ダークシンケンレッド「……俺達もここまでだな」

ダークシンケンジャーはそのまま鏡へと入っていった。

ダークシンケンジャー（後書き）

ダークシンケンジャーはリュウガみたいな存在です。

だから、リュウガ同様自分の実物と融合しようと画策するわけです。

さて、そろそろ物語が核心に迫っていきます。

次回をお楽しみに！！

決戦の幕開け（前書き）

1ヶ月以上開けての投稿……いや、ホントにお待たせしました。

でも内容はどうかで見たことがある、そんなんです。

決戦の幕開け

カイ「あいつら、ダークシンケンジャーに大苦戦したみたいだな」
シタリ「……いよいよだねえ」

シタリは不気味に笑う。

シタリ「後は奴らの『あれ』さえ奪えば……クックッ」

モモタロス「だああああ！！何なんだよあいつらは！？」

士「おそらくミラーモンスターだな」

ことは「ミラーモンスター……」

ことはは全身に鏡をつけた怪人を思い浮かべるが、それを読んだかのように海東が補足する。

海東「ミラーモンスターは鏡の中の世界『ミラーワールド』に存在する生物で、現実世界の人間を捕食することもある……また、現実世界の人間鏡像もこれの一部になる」

士「だが、本来ミラーモンスターは龍騎の世界にしか存在しない……なら考えられるのは一つだ」

コハナ「カイが丈瑠さん達を模したモンスターを連れてきた……？」

シタリ「するどいじゃないか」

「……！！」

全員が鏡を向くと、再びシタリがミラーワールドにいた。

千明「また来やがったのか！？」

士「……相手をするぜ？」

士がドライバーとカードを構える。

シタリ「悪いが今回は遊んでる暇はないよ……お前さん達が持つ時の列車、あれをこっちに渡しな」

良太郎（少年）「えっ！？」

良太郎（青年）「……何をやる気？」

シタリ「簡単なことさ……まだドウコクが倒されていない過去へ行き、この世が外道衆の物になるように時間を改革するのさ」

丈瑠「何だと!？」

千明「んなこと言われて、素直に渡すかよ!」

シタリ「渡さないなら別にいいけどね……その代わり、この時間はあたし達の全勢力で潰すからね」

士「ちつ……どっちにしろ『今』が消えるってことか」

シタリ「明日までは待ってやるさ……じっくり考えるんだね」
そのままシタリは消える。

良太郎（青年）「どうしようか……」

丈瑠「簡単なことだ……俺達が阻止すればいい」

モモタロス「それができりや苦労しないんだろが!」

皆が頭を悩ませていると、

オーナー「ならばいつそ、デンライナーを渡してしまえますか？」

源太「おわあ!？」

いきなり何の脈絡もなく現れたオーナーに驚くが、内容にはさらに驚いた様子で夏海がたずねる。

夏海「渡すって……そんなことしたら!」

オーナー「勿論ただ渡す訳ではありません……」

オーナーはそのまま作戦を話し始める。

翌日

シタリ「来たね……さあ、時の列車を渡すかこの時間を破滅させる

か、どうするんだい？」

丈瑠「……デンライナーを渡す、この時間には手を出すな」

シタリ「そうかい……それじゃあ、乗ってる奴皆降りてもらうよ」

それによりオーナーやナオミも降ろされ、シタリが運転席のバイクにまたがる。

シタリ「待つてなドウコク……もう一度あたしらの天下を取ろうじゃないか……！」

時間を越え、2009年の1月にデンライナーは到着した

シタリ「これで………なっ!？」

はずだが、デンライナーから降りたシタリの目の前には2011年にいるはずの良太郎や丈瑠達がいた。

シタリ「ど、どうなってるんだい!？何でお前さん達がここに!？」

士「どうしても何も、ここは2011年だ」

丈瑠「お前達は時を越えてはいない」

カイ「なん……だと……？」

オーナー「緊急ブレーキを働かせたのです」

オーナーが応える。

シタリ「だがそんな素振りには……」

その時デンライナーからオーナーがもう一人現れた。

オーナー「協力感謝しますよ………駅長」

すると今まで外にいたオーナーは白い制服に早変わりした。

駅長「これもサービスですから」

そう、今までオーナーだと思っていたのは駅長だったのだ。

カイ「くっ……」

丈瑠「俺達がお前達を止める……!」

良太郎（少年）「シンケンジャーの世界も僕らの世界も破壊させな

い…………『今からヒーローの強さつてのを見せてやるぜ!』」
良太郎（青年）「皆、行くよ!」

「『一筆奏上!』」

「一貫献上!」

「『変身!』」

【KAMENRIDE・DECADE】

【KAMENRIDE・DIEND】

【かぶっ】

【LINER form】

【SWORD form】

【ROD form】

【AX form】

【GUN form】

【WING form】

【CHARGE and UP】

【STRIKE form】

シンケンレッド「シンケンレッド! 志葉丈瑠!」

シンケンブルー「同じくブルー! 池波流ノ介!」

シンケンピンク「同じくピンク! 白石茉莉!」

シンケングリーン「同じくグリーン! 谷千明!」

シンケンイエロー「同じくイエロー! 花織ことは!」

シンケンゴールド「同じくゴールド! 梅盛源太!」

姫シンケンレッド「シンケンレッド! 志葉薫!」

シンケンレッド「天下御免の侍戦隊!」

シンケンジャー「『シンケンジャー、参る!』」

電王SF「俺、参上!」

電王RF「お前達、僕に釣られてみる?」

電王A F「俺の強さにお前が泣いた！涙はこれで拭いとき」

電王G F「お前達倒すけどいいよね？答えは聞いてない！」

電王W F「降臨、満を持して」

電王L F「電王、ライナーフォーム！！」

ゼロノス「最初に言っておく！俺達は一か！なり、強い！！」

マチエーデ「カウントは……」

NEW電王「0になってからが本番だ！！」

ディケイド「通りすがりの仮面ライダー！ディケイド！！」

ディエンド「世界のお宝ハンター！ディエンド！！」

クウガ「皆の笑顔を守る戦士！クウガ！！」

キバ「ちよっ！？私だけ……皆スルいですよ！！」

一部抗議の聲が上がったが、それは敵も軽くスルーする。

シタリ「…ならあたし達が倒せば良いんだ！行くよ、お前さん達！

！」

シンケンレッド「……来い！」

遂に大決戦の幕が開いた。

決戦の幕開け（後書き）

次回から決戦！……なのですが、投稿時期は未定です。
すみません。

起死回生（前書き）

スペシャル来たあああああ！！

今回、オリジナルフォームが登場します！！

起死回生

シタリの声でナナシがわらわらと飛び出してくる。

デイクライド「こつちも行くぜ！」

【「ATTACK RIDE - BLAST」】

まずデイクライドとディエンドのプラストがナナシの前線を撃ち抜いた。

さらに

シンケンレッド「シンケンマル！六重の太刀！」

シンケンジャー六人が一気に斬り掛かる。

姫シンケンレッド「百火繚乱！」

キバーラ「ソニックスタツプ！」

姫シンケンレッドが炎を纏った烈火大斬刀を振るい、キバーラが光の翼で飛行しながらナナシを斬り付ける。

クウガ「はあああ！！！」

電王RF「たあああ！！！」

クウガと電王RFのダブルライダーキックがナナシの群れに命中する。

電王AF「ダイナミックチョップ！」

NEW電王「はあ！」

電王AFがデンガツシャーを尻ぎ払い、さらにNEW電王がマチェーデを一閃する。

ゼロノスZF「だあああ！！！」

ゼロノスZFがデネビックバスターを連射し、

【FULLCHARGE】

電王WF「はあ！」

電王WFのロイヤルスマツシュがナナシを切り裂く。

電王SF「俺の必殺技…Part2!!」

電王LF「電車斬り!!」

電王SFと電王LFの必殺技が当たったのと同時に、シタリに呼び出されたナナシは全滅した。

シタリ「な、な……」

ほぼ一瞬にしてナナシが全滅したことでシタリが狼狽える。

カイ「やるなあ……でも!!」

カイが指を鳴らすと牙王、ネガ電王、幽汽、ダークシンケンジャーが現れる。

さらに

シルバラ「うう、え、こちら戦線、指示を!……p) - ¥g#0

^v*!……了解!」

ゴルドラ「……遊ぶな、ミミヒコ」

ゴルドラとシルバラまでもが現れる。

カイ「さあ、圧倒的な力に屈しな!」

カイの言葉と同時にダークライダー達が一斉に襲い掛かってくる。

ダークシンケンレッド「はあ!」

シンケンレッド「くっ……!」

シルバラ「おらおら!もつと楽しませてみるよなあ!?!」

電王LF「うっ……」

NEW電王「うわあ!」

牙王「…………どうした？終わりか？」
ディケイド「がっ…………はっ！」

シンケンジャー、電王、ディケイド、全員が大ピンチに陥る。

クウガ「ぐっ……」

姫シンケンレッド「なんという強さだ…………まるで何人ものドウコクを相手にしているかのようだ」

ネガ電王「当たり前だ…………俺達の強さは別格、最後にやられるようなセコい悪じゃないんだよ」

ゴルドラ「否…………滅んだ方が悪なのだ」

ダーク姫シンケンレッド「お前らの後釜は私達が受け継いでやる……

…………だから早く死ね！」

口々に罵詈雑言を浴びせる悪役達。

だがその時

シンケンレッド「…………ふざけるな！」

シンケンレッドがふらつきながらも立ち上がる。

さらに

電王SF「ごちゃごちゃうるせえんだよ…………俺達のクライマックス、舐めんじゃねえ——！」

電王LF「僕達はまだ諦めたわけじゃない…………最後まで戦う！」

シンケンブルー「そうだ…………私達は倒れている暇などないのだ——！」
クウガ「この世界の笑顔を…………消させはしない！」

姫シンケンレッド「私達が…………お前達を倒す！」

他の戦士も次々と立ち上がる。

そんな姿を見て、悪役達は嘲笑う。

幽汽「…………哀れだ」

ダークシンケンゴルド「悪あがきにもほどつてもんがあるぜ…………

？」

ダークシンケンブルー「力の差は歴然……ならば心底のバカなのだ
な」

ディケイド「……心底のバカはてめえらだ」

ダークシンケングリーン「あん？」

ダークシンケングリーンが睨むが、ディケイドは気にせず、ゆつくりと立ち上がりながら悪役達に説いていく。

ディケイド「確かに戦闘の強さは劣ってるかも知れない……だがな、それでも守りたいものがある奴らは諦めずに闘う……いつまでだって闘い続ける！ここにいる奴らには絆の強さ、約束を守る強さ、バカなりに闘う強さ、そして決して挫けない心の強さがある！表面だけの強さには到底勝てないほどの大きさのな！！」

ダークシンケンピンク「ふん……馬鹿馬鹿しい」

ディケイド「馬鹿馬鹿しいようだが……受けてみたら分かる！」

ダークシンケンレッド「……お前、なんなんだ？」

ディケイド「通りすがりの仮面ライダーだ、覚えておけ！！」

その時、ケータッチが光り輝きはじめた。

しかも本来の色ではなく、色とりどり……シンケンジャーと同じ色である。

ディケイド「……なるほどな」

ディケイドはケータッチを光る順番になぞる。

【HYPER / SURVIVE / KING / BLASTER / ARMED / SHINING / EMPEROR】

するとシンケンジャーの前にライダーの紋章が並び、シンケンレッドはカブトハイパーフォームの力を、シンケンブルーは龍騎サバイブの力を、シンケンピンクはブレイドキングフォームの力を、シンケングリーンはファイズブラスターフォームの力を、シンケンイエローは装甲響鬼の力を、シンケンゴールドはアギトシャイニングフォームの力を、姫シンケンレッドはキバエンペラーフォームの力を手にする。

最強のライダーの力を纏った彼らは『コンプリートシンケンジャー』となる。

シンケンブルーSV「これは……!」

シンケンゴールドSF「すげえ……力が溢れてくるぜ!」

シンケングリーンBF「これなら……あいつらに勝てんじゃね!」

シンケンレッドHF「いや……必ず勝つぞ!」

さらに

【FINAL KAMEN RIDER - DECADE】

ディケイドは胸のヒストリーがコンプリートシンケンジャーの物になった『シンケンコンプリートフォーム』になる。

シンケンジャーがパワーアップしたのを見て、

クウガ「よし、俺も!はああああ……」

クウガが力を込めて闇の力を解放し、ライジングアルティメットクウガになる。さらにさらに

電王SF「よし、てんこ盛りで行くぜ!今日は特別だ、手羽も入りやがれ!」

電王SFがケータロスを構える。

電王RF「ま、そうなるよね」

電王AF「よっしゃ、いくで!」

電王GF「わーいてんこ盛りい!」

電王WF「行くぞ、家臣達よ!」

電王SFに他の4人が入り込む。

デンカメンはそれぞれロッドが左腕、アックスが右腕、ガンが胸、ウィングが背中に張りつき、ソードのデンカメンが四枚になる。

ここに超電王が現れた。

電王SCF「こっからが本当のクライマックスだぜ!」(U:ちょ、狭いんだからポーズ取らないで先輩!)(R:クマちゃんもつとそっち行つてよお)(K:こらリュウタ押すなて!)おい!?暴れんてめえら!!(W:くるしゅうない)苦しいんだよバカ!お前だけ出てくか!」

デイクイドCF「……相変わらず騒がしい奴らだ」

シンケンレッドHF「さて、反撃開始だ!!」

電王SCF「ああああ! せっかく俺がかっこよく決めたかったのに

!! (良: いいから行くよ、皆!) おう!!」

起死回生（後書き）

次回、大大大大反撃が始まる！！

絶対に見てください！！

時空超越大決戦（前書き）

ホントに久しぶりの更新です。

すみません、お待たせして。

ではどうぞ

時空超越大決戦

ダークシンケンブルー「はあっ！」

ダークシンケンブルーがシンケンマルで斬り掛かるが、

【SWORD VENT】

シンケンブルーSVは左手に装着されたバイザーにカードを読み込ませ、バイザーから伸びた水の刃で受けとめ、

シンケンブルーSV「……はっ！」

さらに水が流れるが如くシンケンマルをいなし、そのまま胴に一閃を見舞う。

ダークシンケンブルー「がっ………!!」

シンケングリーンBF「やるじゃん流ノ介!じゃ、俺も……はあっ!!」

シンケングリーンBFも宙からダークシンケングリーンを蹴りつける。

ダークシンケングリーン「ぐあっ!?!……ちくしょう、ちょこまか!!」

シンケンピンクKF「はあ!!」

ダークシンケンピンク「ぐっ!?!」

シンケンピンクKFがキングラウザーで斬り掛かり、シンケンマルでガードしたダークシンケンピンクは攻撃の重さのあまり吹っ飛ばす。装甲シンケナイエロー「凄い莱子ちゃん!そんな重そうな剣ど……」
シンケンピンクKF「それが全然重くないんだ、シンケンマルを振ってる感じ」

その時

ダークシンケナイエロー「ウチを忘れたらあかで!ランドスライ

サーー!!」

ダークシンケンイエローがランドスライサーを投げつけてくる。
しかし

装甲シンケンイエロー「はああ!!」

シンケンイエローが装甲声刃から波動を放ち、ランドスライサーを弾いただけでなくダークシンケンイエローにもダメージを与える。
ダークシンケンイエロー「ぐあう……」

シンケンゴールドSF「行くぜ?薫姫」

E姫シンケンレッド「言われなくても」

二人は静かにシャイニングカリバーとザンバットソードを構え、
シンケンゴールドSF/E姫シンケンレッド「はっ!!」

素早い身のこなしで、E姫シンケンレッドは渾身の一撃を、シンケンゴールドSFは目にも止まらぬ連撃をそれぞれ浴びせる。

ダークシンケンゴールド「ぐふっ!?!」

ダーク姫シンケンレッド「が……は……」

牙王「大人しく食われろ!!」

ゼロノス「はっ、そんなところお断りだな!!」

ゼロノスはゼロガッシャーで牙王の斬撃を受けとめ、均衡状態をたもつ。

と

【FULL CHARGE】

牙王「いや……お前は俺に食われるのさ」

そのままゼロノスにデンライダーキックを放とうとするが

【ATTACK RIDE - BLAST】

ディエンドがブラストで牙王を撃つ。

しかし

牙王「無駄だ」

牙王はデンライダーキックの標的を迫りくるブラストに代え、相殺した。

牙王「策が尽きたな……がはっ!？」

突如牙王の背中に火花が散る。

牙王「て、てめえ……」

牙王の背後にはデネブがいた。

さらにディエンドが牙王を撃つ。

ディエンド「一歩先まで読んでこそだよ」

牙王「ぐっ……」

ネガ電王「はっ!！」

ネガ電王はデンガッシャーで攻める。

キバーラはそれをキバーラサーベルで受けとめるが、ネガ電王の攻撃でガードが崩されかける。

キバーラ「くっ……」

ネガ電王「おわりだ!」

しかし、デンガッシャーを受けとめる者がいた。

ネガ電王「なっ!？」

クウガRU「悪いけど、終わらせないよ!はあっ!！」

そのままネガ電王を殴り飛ばした。

ネガ電王「ぐはっ!？」

幽汽「はあ!」

幽汽は独楽を飛ばして来た。

NEW電王「じいちゃん！」

電王LF「うん！」

しかしNEW電王と電王LFはデンカメンソードとマチエーテディで独楽を弾く。

幽汽「うおおおー！」

幽汽はさらに攻めてくるが、二人でそれを受け止め、幽汽に斬り掛かる。

幽汽「ぐう……」

シルバラ「このやる！」

シルバラが金棒を振るって電王SCFに迫るが、電王SCFはそれを軽々かわし、シルバラに斬撃を決めていく。

ゴルドラ「ミミヒコ！おのれー！」

一方ディケイドと斬り結んでいるゴルドラもディケイドに苦戦していた。

ディケイドSCF「どうした？オニの長ならもつと本気でこいよ？」

ゴルドラ「ほざけー！」

ディケイドの挑発に、ゴルドラは杖を振るうが

ディケイドSCF「……残念だったな」

ディケイドは杖を避け、ライドブッカードで一閃する。

シンケンレッドHF「はっ！」

ダークシンケンレッド「ぐう……」

ダークシンケンレッドはシンケンマルで必死に攻めるが、シンケンレッドHFはそれを簡単にいなし、圧倒する。

ダークシンケンレッド「なぜだあ！なぜ、お前らはあー！」

シンケンレッドHF「俺達は人々のために戦う……ただそれだけだ」
ダークシンケンレッド「おのれ！」

ダークシンケンレッドは距離を取り、烈火大斬刀を大筒モードにしてシンケンレッドHFに向かって火炎弾を放つ。
が、

シンケンレッドHF「はっ！」

ダークシンケンレッド「バ、バカな……」

シンケンレッドHFは火炎弾を断ち切ったのだ。

その手には金色の剣、パーフェクトゼクターが握られている。

シンケンレッドHF「終わらせよう……」

シンケンレッドHFの言葉と同時に手の平大になった獅子折神、兜折神、舵木折神、虎折神がパーフェクトゼクターに装着される。

【SHISHI OLIGAMI, KABUTO OLIGAMI,
KAZIKI OLIGAMI, TORA OLIGAMI A
LL OLIGAMICOMBUI - MAXIMUM MOZI
KARA CYCLONE】

パーフェクトゼクターから凝縮されたモジカラの渦、『マキシマムモジカラサイクロン』がダークシンケンレッドにぶち当たる。

ダークシンケンレッド「ぐあああー！」

シンケンブルーSV「行くぞ千明！」

シンケングリーンBF「分かってるって！」

【SHOOT VENT】

【BLASTER MODE】

ダークシンケンブルー/ダークシンケングリーン「ぐああああー！
！」

【Royal Straight Flash】
装甲シンケンイエロー「はぁぁぁぁ……」
シンケンピンクKF／装甲シンケンイエロー「はっ！」
ダークシンケンピンク「がはっ！？」
ダークシンケンイエロー「あう……」

シンケンゴールドSF「行くぜ！シャイニング百枚卸！！」
シンケンゴールドSFが輝く斬撃でダークシンケンゴールドとダーク姫シンケンレッドを斬り付け、
E姫シンケンレッド「…はぁー！」
E姫シンケンレッドがザンバットソードを一閃し、斬撃波を飛ばす。
ダークシンケンゴールド「ぐう……」
ダーク姫シンケンレッド「かはっ……」

【FINAL ATTACK RIDE - DIDDIDI DIEND】
【FULL CHARGE】
デイメンションシユートとバスターノヴァが牙王に命中する。
牙王「ぐぁぁぁぁー！」

クウガRU「はっ！」
クウガRUがネガ電王を思いっきり殴りつける。
ネガ電王「ぐう……」

キバーラ「はあ！」

さらに、ネガ電王が怯んだ隙にキバーラがソニックスタップを放つ。
ネガ電王「ぐああっ！！！」

電王LF「行くよ、幸太郎！」

NEW電王「ああ！」

オーライナーに二人で乗り込み、デンカメンソードとマチェーテ
ディを構える。

電王LF「二人で電車斬り！！！」

NEW電王「いや名前！……ああ！やけくそだ！！！」

『二人で電車斬り』もとい『ツインフルスロットルブレイク』で幽
汽を斬り付けた。

幽汽「ぐう……！」

ディケイドSCF「さて、とどめ行くぞ」

電王SCF「へっ……言われなくてもそうするっての！」

【FINAL ATTACK RIDE - DEDEDE DECADE】

【FULL CHARGE】

ディケイドSCF「はああああ！！！」

電王SCF「でりやあああ！！！」

強化ディメンションキックをシルバラに、超ボイスターズキックを
ゴルドラにそれぞれ決める。シルバラ「グハッ……に、兄ちゃん……
い、いい夢見ようぜ」

ゴルドラ「グウ……ミミヒコ……あ、あの世で再び会おう……」

そして互いにサムズアップし

ゴルドラ／シルバラ「あばよ……」

ドガアアア！！

戦士達の必殺技を受けたダークシンケンジャーとダークライダーは爆発した。

それを見てシタリは

シタリ「ま、まずいよ……………あんな力があるんじゃないあたらに勝ち目は無いじゃないか!？」

カイ「……………いや、まだ方法はある」

シタリ「ホントかい！一体どうやって……………うぐっ!？」

カイ「こうするのさ」

カイはシタリの身体の中に手をつっ込んだ。

シタリ「ぐっ……………何をするつもりなんだい!？」

カイ「お前が重ねている時間の流れを逆流させる……………これだけの時間を一気に逆流させ、暴走させれば奴らを上回るだろう」

シタリ「ま、待ちな！それじゃああたしはどうなるのさ!？」

カイ「……………さあな」

カイはシタリの身体から腕を引き抜きながら淡々と言い放つ。

シタリ「カイ！お前さんって奴は……………グゴ……………外道しゅ……………ガボボ……………こけにしたね?……………グオ」

カイ「もう無理せず楽になれよ、見てて辛いぜ？俺、そういう顔してるだろ?」

カイは言葉とは裏腹にニンマリと笑うと、オーロラの向こうへと消えた。

で、同時に

シタリ「ガアアアアアアアアアアアアアアアアア!」

シタリは凄まじい咆哮と共に巨大化した。

いや、それは既にシタリではなく強大な怪人と化している。

シタリ暴走態「グウウウウ……」

シタリ暴走態はシンケンジャーを見つけると

シタリ暴走態「スウ……バアアアア……」

何のためらいも無しに極太のエネルギーを発射してきた。

「……うわあああ!?!?!」

爆発に巻き込まれる戦士。だが、

「……侍合体!?!」

電王SCF「おらあ!?!」

爆炎からシンケンオーとデンライナーが飛び出す。

シタリ暴走態「グツ!?!」

シタリはそれに怯むが、すぐにシンケンオーと宙を縦横無尽に走る

デンライナーを睨み付けた。

電王SCF「いよいよ本当のクライマックスってやつだな」

シンケンレッドHF「……これで終わらせる!」

シンケンオーとデンライナーがシタリに向かっていった。

時空超越大決戦（後書き）

多分次回で最終回です。

そして次回、シンケンジャーのFFR発動！？

変幻真剣王、そして未来は（前書き）

最終話です。

タイトルではれてるかも知れませんが、アレがアレされます。

変幻真剣王、そして未来は

シンケンオーとデンライナーがシタリ暴走態を倒し、闘いに終止符を打つべく闘う。

しかし、

シタリ暴走態「ガアアア!!」

シタリ暴走態は触手を振り回し、目から怪光線を放ってシンケンオーやデンライナーは逆にダメージが溜まっていつている。

シンケングリーンBF「おいおい……完全にイカレてるぜあいつ」

E姫シンケンレッド「これが外道衆の幹部の末路とは……哀れだな」

電王SCF「何悠長に話してんだよ!? 近づかねえじゃねえか! (良: お、落ち着いてモモタロス) (U: そうそう、大物を釣るには我慢が……) うるせえな! てめえらもあのイカ倒す方法考えろ!」

デンライナーがシタリ暴走態の周りを走りながらビームを放っている。

しかしシタリ暴走態にはダメージが薄く、触手を振り回してデンライナーを叩き落とそうとしている。

そこにシンケンオーが斬り掛かり、触手の一本を切り落とす。

だが、

シタリ暴走態「ギシャアアア!!」

シンケンレッドHF「なに!？」

シタリ暴走態はそれがなんととも無いかのように襲い掛かってきた。

「うわぁ!!」

シンケンオーが倒れこむ。

シンケングリーンBF「……嘘だろ?」

シンケンピンクKF「いくらなんでも……おかしくない?」

シンケンブルーSV「どんなに強い生物でも、身体の一部を失って平然としていられるはずは無い!」

また、それをデンライナー内から見ていたコハナも

コハナ「ちよっ……嘘でしょ!？」

幸太郎「暴走つてレベルかよあれ!？」

テディ「オーナー、時間を暴走させるとは一体？」

オーナー「生命ある者は全て生まれ落ちたその瞬間から、『生きる』という行為で自らの中に時間を積み重ねていきます。その時間を逆流させれば莫大なエネルギーが生まれる反面、積み重ねてきた時間を失うのですから、存在は消滅します」

デネブ「じゃあ！頑張つて耐えていればそのうちに……」

侑斗「いや、そうはならないだろうな……だろ？」

オーナー「その通りです……常に時間は積み重ねられていきます。本来は逆流の勢いが上回るため、先に存在が消滅します。ですが…

……」

良太郎（青年）「外道衆は過ごした時間が遥かに多いから、半永久に暴走が続くつてことですよね」

オーナーは黙つて頷く。

コハナ「じゃあ……」

侑斗「何とかして倒さない限り、世界は救えないってことだ」

絶望の空気が流れかけたその時、

電王SCF「バ力野郎諦めんな!」

シンケンレッドHF「俺達が諦めてどうする!？」

電王SCFが操縦席から怒鳴り、シンケンオーが立ち上がる。

士「その通りだ……俺達が諦めたら全てが終わりだからな」

今まで窓から闘いを見ていた士も立ち上がる。

電王SCF「俺達は……」

シンケンレッドHF「絶対に……」

士「負けるわけにはいかないんだ!」

全員の気持ちが一つになった時、ディケイドドライバーからカードが飛び出した。

そのカードには新たなデンライナーが描かれていた。

士「これは……俺達の切り札か」

士はカードを見て微笑むと、デンライナーの乗降口へと向かう。

夏海「士君？」

士「決着をつけてやる……変身！」

【KAMENRIDE - DECADE】

士は変身し、デンライナーから飛び降りてシンケンオーへと乗り込む。

シンケンレッドHF「…士」

ディケイド「行くぞ、丈瑠」

シンケンレッドHF「ああ」

そしてディケイドがカードを挿入する。

【FINALFORMRIDE - SHISHISHI SHINK
EN - O】

シンケンオーは折神五体に分離し、別の形へと合体する。

その姿は

コハナ「えっ、デンライナー？」

これは『シンケンライナーツルギ』、シンケンオーのFFRである。車両にはダイシンケンの刃がついている。

シンケンライナーツルギはデンライナーゴウカと連結した。

それと同時にマシンデンバードがシンケンジャー達の前に現れる。

電王SCF「うおっ!？」

正確にはシンケンオーのコクピットとデンライナーのコクピットが融合したのだ。

ディケイド「さあ、行くぞ！」

電王SCF「へっ……一気に決めてやるぜ！」

連結した列車はシタリ暴走態に突き進んでいく。

シタリ暴走態「ガアアア!!」

シタリ暴走態は何本もの触手を伸ばしてくる。

だが、シンケンライナーが触手をバサバサと切り裂いていく。

そして

シタリ暴走態「ガア!？」

シンケンライナーが通過すると同時にシタリの身体が切れ、そこから時間が光になって漏れだす。

シンケンレッドHF「まだまだ!」

さらにシンケンライナーは二回、三回とシタリ暴走態を斬り付けていき、そのたびに時間が放出されていく。

ディケイド「とどめ、行くぞ!」

電王SCF「おおっ!」

シンケンレッドHF「ああ!」

【FINAL ATTACK RIDE - SHISHISHI SHI
NKEN - O】

シンケンライナーが空に向かって上昇しながらダイシンケンが輝く。そしてそこから一気に急降下する。

電王SCF「行くぜえええ!俺達の必殺技……!」

「「サムライクライマックス!!」」

シンケンライナーがシタリ暴走態を真つ二つに切り裂いた。

シタリ暴走態「ジャ……グバギヤアア!!」

シタリ暴走態はそのまま大爆発した。

全てが終わり、歩いている戦士達。
すると

剣崎「さすがだな」

士「剣崎……」

剣崎「全ては終わった…電王の世界とシンケンジャーの世界を分離

させる」

夏海「え？」

千明「どういうことだよ？」

剣崎「ここでの出来事は本来起こりえない事態だった……カイが強引にくつつけたただけだ」

ユウスケ「世界が切り離されると……どうなるんだ？」

剣崎「本来はその時の記憶は消える……だが特異点が絡んだ以上、過ぎた時間は残る」

丈瑠「そうか……」

剣崎「分離はそれぞれの場所に帰りついたら行っ、分かったな」

最後に剣崎は青年良太郎をちらりと見てオーロラの向こうへと消えた。

良太郎（青年）「……？」

青年良太郎は首を傾げたただけだった。

そして別れが迫っていた。

流ノ介「世話になったな」

良太郎（少年）「いえ、そんな……こちらこそ」

ウラタロス「茉莉ちゃん、ことはちゃん、また会ったらデートしようね」

ことは「あ……え」と

茉莉「残念だけど、お断りするわ」

ジーク「そなたのことも姫と呼びたい」

薫「私は既に姫だ」

モモタロス「なんつか……ありがとな」

丈瑠「こちらも助かった……感謝する」

それぞれ別れの挨拶を済ませる。

そして

デネブ「皆さん！侑斗を忘れないでください！」

侑斗「デ〜ネ〜ブ〜？」

侑斗がデネブにプロレス技をかけ、周りに笑いが巻き起こった。

志葉邸

彦馬「殿！」

丹波「お帰りなさいませ、姫！」

丈瑠達が志葉邸に帰ってきた。

千明「ふう……やっぱここが一番だな」

皆が座って和んでいると

ことは「あ……」

ことはの声に窓の外を見ると、街の上空にオーロラが浮かび、そこをデンライナーがくぐると同時にオーロラが消滅した。

丈瑠「……世界が分離したんだな」

デンライナーもオーロラをくぐると同時に世界が変わっていた。

モモタロス「……分離したんみてえだな」

リュウタロス「うわああああん！寂しいよおお！！」

士「どうってことは無い……行こうと思えば行けるんだからな」

ユウスケ「そりゃ俺らはな……」

海東「さて、そろそろ僕らも行こうか」

士達はデンライナーを降りた。

そして出てきたのは写真館の中。

ユウスケ「都合いいなあ……」

士「さあ、次の世界へ行くぞ。」

士が鎖を引いて絵を変える。

次の世界は

士「ファイズの世界か……」

カイ「な、なんなんだよお前!？」

オーロラを通して逃げてきたカイの前には一人の青年がいた。

???「お前は俺の楽しみの邪魔をしたんだ……ブレイドとキバのおかげで元に戻ったが、許すわけはないだろう?」

彼の周りには無惨な姿になったイマジンが転がっている。

???「なあ、お前死ねよ?」

青年はカイの首を掴み、締めはじめた。

しかも青年はいつの間にかライダーに変身していた。

カイ「が……たすけ………」

???「じゃあな」

ライダーの腕がカイの身体を貫いた。

カイ「ガッ………」

ライダーはカイを地面にカイを投げ捨てた。

カイは二、三度痙攣した後息絶えた。

???「ま、今回は『士』に感謝だな……だが俺の楽しみは邪魔させない」

ライダーは手から血を滴らせながら不適に笑う。

マゼンタのマスクの、緑色の瞳の奥で……

変幻真剣王、そして未来は（後書き）

最後に出てきた青年とは……………？

次回に設定集を投稿し、真の完結になります。

本編のご愛読ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1217u/>

仮面ライダー×仮面ライダー×スーパー戦隊 電王・ディケイド・シンケンジ

2011年11月29日22時54分発行